第１回　ＳＤＧｓ未来都市鶴岡　デジタル化推進有識者会議
（会議概要）

○　日　　時　　令和５年２月２０日　　午前１０時から
○　会　　場　　Zoom（オンライン会議）
○　出席委員　　天野　隆興　委員、大西　宏昌　委員、神尾　文彦　委員
　　佐藤　理沙　委員、渋谷　真子　委員、渡会　俊輔　委員
　　渡邉　賢一　委員、渡辺　理絵　委員
○　欠席委員　　大橋　康史　委員
○　傍 聴 者　　５名

○　会議概要
１　開会
２　市長あいさつ
３　委員紹介
４　座長選出
・委員の総意により、神尾文彦委員を座長に選出。
５　これまでの経過と今後の有識者の役割について
・事務局より、資料 P1～5 を説明。
６　協議
（１）地方創生推進交付金 Society5.0 の取り組みについて
（２）今後取り組むべき活動テーマについて
・事務局より、資料 P6～13 を説明。

○座長
議論のポイントとしては、市民のデジタル化に対する意識をどれだけ高めていけるかというのが 1 点目。鶴岡の成長、発展といったものをデジタル化によってどういうふうに実現していくのかというのが 2 点目。それ以外にも個別分野ごとのテーマもあるが、まずはこのポイントを中心に意見交換、提言をいただきたい。まずはマイナンバーカードに関して、急速に申請が進んでいて、市民カード化によって需要を高めていくという提言をいただいているが、補足や背景などを委員に伺いたい。

○委員
鶴岡市でも交付ベースで 60%と普及が進んできているので、図書館や施設の予約、あるいは病院の診察券などで利用できるようにするなどで、マイナンバーカードの利便性を高め、普段から皆さんが使えるようなカードにしていったらいいのではないかと考えた。

○委員
今回、鶴岡市で各コミセンにマイナンバーカード作成会場を設けていたのだが、三

瀬コミセンにも40人くらい、と、かなり多くの方が来られた。ただ、マイナンバーカードを作る目的がほぼポイントのためであり、公金受取口座の紐づけも自分の個人情報がさらけ出されるようで、怖くてできない、という方も多かった。

また、例えば認知症の方がマイナンバーカードを持っていると、どこにしまったかわからなくなることを家族が危惧していたり、カード自体持ち歩くのが怖かったり、といった声も聞こえる。

その一方で、高齢者で免許を自主返納した方がマイナンバーカードを身分証明として出すケースも少しずつ見受けられている。また、お薬手帳のような薬の管理ができればいい、という話も聞こえてくる。

○委員

今年度から、ふるさと納税のワンストップ特例でオンライン申請できるようになったが、鶴岡市もこれに対応している。これも一つの活用例なので、こういった取り組みをどんどん広げていけたらよい。

○委員

山形県では障害手帳が昔ながらの紙の障害手帳となっている。他県ではもう、カード型になっているところもあるが、紙だとケースに入れないとボロボロになってしまったり、間違って洗濯してしまうともう読めなくなったりしてしまう。毎年の補助申請だったり、新たに車いすを作る時だったり、毎回行って手帳のコピーのやり取りをする手間がすごくある。障害のほか、介護などについても、マイナンバーカード活用して、デジタルで申請可能になれば、移動に不便な人たちが市役所に行かなくてよくなって、すごくいいのかなと思う。

30代くらいで子供がいないと広報を見ないと思う。LINEについても、20代後半30代の人たちに十分届いていないのではないかと思う。広報などの紙ベースだったり、市役所に行って連絡や広告を見ないと分からなかったり、というのがよくないと思うので、飲食店などを活用し、LINE登録するとこんなに便利になる、といったことを伝える方法を考える必要があるのではないかと思う。

○委員

マイナンバーは一生つく番号なので、進学や就職などで鶴岡から外に出て行くような若い人にこそ周知が必要なのだろうなと思った。それを無理やり鶴岡から出て行くな、とはできないが、外に出て行っても鶴岡とずっと絆を保ってもらってほしいと思う。鶴岡のデータを見ると、若い人が出て行く割合は多いが、戻ってくる人の割合も多い。外に行って初めて鶴岡の良さが分かる部分もあり、進学や就職で都心に行っても、例えば、就職、結婚、子供が生まれたなどのタイミングで鶴岡に戻りたいと思うときもある。それに備え、鶴岡での求人情報や移住促進策のような情報をマイナンバーの仕組みと組み合わせて、県外の人に常にメッセージを発信し続けることができれば非常に大きなメリットになるかと思った。

○委員
　広報にも載せているような、最近の寒鱈まつりのようなイベントのお知らせを随時LINE で発信できれば、全国どこにいても、どこに出て行ったとしても情報が得られると思う。

○委員
　プラットフォームとしてはLINE が一番いいと思う。東京でも、庄内物産展や寒鱈まつりをしているが、東京に住んでいる人は誰もわからなかったりする。LINE を使って、地域外の鶴岡に縁がある人に季節のイベントを発信するのは非常に大切だと思う。

○座長
　デジタル化は市民から見ると、普通に使っている人は身近に感じるが、使っていないと完全に遠い世界になってしまって実感がわかない部分もあるかもしれない。ただ、デジタル化は目的ではなく手段であって、デジタルがバックにあって交通機関が便利になったり、新しいサービスが生まれたりというのはアナログな部分もあり、デジタルを感じなくても生活が利便になる部分もある。だから、なんでもデジタルを駆使して住民サービスを提供するのではなく、見えないところも含めてデジタルがこう貢献しているというのをどう伝えていって認識してもらうのかも重要なポイントと思う。いずれにしろ、デジタル化を市民の方々に感じてもらって身近なものにしてもらうため、もう一つ二つ工夫が必要かと考える。

○委員
　AI の登場などにより、かなりの職業がAI などの自動化に置き換わっていくのは間違いないと思う。ただ、IT エンジニアのみならず、技術の進歩についていけるか不安を抱えている人は多い。経済産業省の資料によると、求められる能力もどんどん変わってきていて、この数ヶ月でもかなり置き換わり始めてきている。鶴岡のみならず日本全体で人材競争力が非常に下がってきているが、この一つの理由が自分に投資しないところだと思う。年齢を重ねるにしたがって、正規雇用以外の方々がジョブ型で働いていくと、さらにスキルが必要になってくる。こういう環境にどうデジタルを使いながら対応して乗り越えていくか、といったところは非常に重要な観点ではないかと思っている。鶴岡の場合、慶應などの大学があったり、ガストロノミーの環境があったりするところは幸運だと思う。日本の科学リテラシーはトップレベルとのデータもあり、鶴岡にはこの科学リテラシーが高い人たちが多い可能性があるので、こういったところを活用し、人の学びの仕方といったものを作っていけるのではないかと非常に期待している。
　特に食の鶴岡と言っているが、食の部分は置き換わらないと思うのが一つ。最近、SDGs からIDGs と言葉が変わってきている。インナーデベロップメントゴール、と、自分たちはどういうふうに生きていきたいのかといったことに世界的な関心がシフトし

てきている。鶴岡では、山の知恵も含めて古い歴史もあり、自分の生き方とどう向き合っていくのかといったものに出会うチャンスがあると思うので、IDGs のなかで、鶴岡ならではのメッセージがかなりあるのではないかと考えている。

また、これまでみたいに知識や情報を貯めて右から左に流していくのではなく、そのプロセスをどう共有していくのかがツボになってきていると思うので、LINE も含めて、情報共有のパスを増やしていくといったことの方が大事かと思っている。

○座長

発信力があるコアな住民にデジタル化のよさをいろんな形で発信してもらうというのも一つの手段としてあるのではないか、という意見も委員からいただいている。

昔に水道の老朽化関係のことをしていたが、水道の老朽化の大変さを分かってもらうために、コミュニティの代表の方だけを呼んで、塩素がすごく詰まった写真と現物を見せて分かってもらうといったアウトリーチ法といわれる手段がある。デジタル化のいい面も悪い面も含めて、コアの人に伝えていくようなやり方もあるのかな、と思っている。

○委員

今は一般の人も企業の人も行政の人も SNS を活用している。成功例として、沖縄県のとある市で、市長自身が TikTok をしていて、市のいいところを募集し、そこに市長が行きます、ということをした結果、観光客のみならず地元の人にも周知の効果があり、地元の人たちが協力するようになり、市民と行政と一緒になって盛り上げるといったこともある。人件費は必要だろうが、ツール自体に費用はかからない。

しっかり真面目な部分も必要だと思うが、若い人は堅い情報しかないのは見たいと思わないので、LINE とかでの広報はもう少し面白く、はじけた感じの方が今の時代に合っているのではないかと思う。東京でも寒鱈まつりをしているという話もあったが、東京支部の方がツイッターで投稿したのを見て、私がリツイートしたことにより、私をフォローしている人たちがそのおまつりに行ったということもあったので、今の時代に合った使い方をするのが、鶴岡市には必要なことではないかと思っている。

○座長

高等専門学校があることは鶴岡の特徴であり、メリットだと言われていた。研究や授業のプログラムとしての地域課題解決と、鶴岡に残って仕事をして盛り上げることはつながっていない部分もあるのではないかという問題提起をいただいている。

○委員

やはり鶴岡は、１回外に出てから戻ってくる数が結構多く、私もよく相談を受けたりする。数年前に、商工会議所等々に高専生と大卒の初任給を一緒にしてほしいとお願いしたことがあり、現在県内で 20 社くらいにそういう対応をしてもらっていて、実際、そういう会社には高専生が就職する。学生の本音として、割とお金の問題は大き

いと思う。

研究課題としてやっているのは、卒業するためだったり、いい成績をとるためだったりという側面が少なからずあり、自分の将来と結び付けて考える場合はあまりない。本校では５、６年ほど CO-OP 教育をやっている。これはインターンシップのようなものではあるが、３年生からいけて、春休みと夏休みに家から通える地元企業限定で２週間受け入れてもらっている。最近、実際に CO-OP 教育で働いたところに就職するという例が一定数見えてきている。それは、そこで働く人たちの風土や文化が自分に合っているかを認識したうえで応募できるということがメリットになっている。その企業が何を作って、どういう仕事をしてといった表面的な部分だけで選ぶとやっぱり大手に行ってしまう。若者が地元企業や地域の方とどんどん接触する部分を増やし、実感を持てることが非常に重要という印象を持っている。

ところが、授業に企業の方を巻き込んだプログラムを取り入れようと募集をかけると、大手の方がフットワーク軽い。大手の方がそういうところに投資できるが、地元の中小企業ではその余裕がなく、なかなか手を挙げてくれない、ということが現実に起こっていて、なかなか難しい。

〇委員

コロナの関係で、小中学校で貸与されたタブレットを使ってオンライン授業をするとなった時、親はタブレットで Zoom とかできるのかと心配していたが、普通に機器を使用して、オンラインで楽しそうに授業をしている姿を見ることができた。家庭にいながら、先生たちとの関係や子供同士の関係を見ることができたことで、保護者の間でももっとオンライン授業やってほしいという話になった。もっと IT 分野の教育に力を入れて、子供のうちからもう当たり前に考えられるような教育も必要ではないかと思う。高齢者からは若いと言われる 40 代 50 代の人も、私の周りではスマホも全然使えない人が割と多い。むしろ 80 代といった方のほうが積極的にオンラインを使っていたりする。

〇委員

鶴岡市の特色の一つが市の面積が非常に大きいことであり、海、山、中山間地域といろいろあるが、実は鶴岡市のブロードバンドカバー率はほぼ 100%になっている。そのため、これだけ自然環境が豊かで多様性に富んでいるところだが、どこでもテレワークできるというところが一つの大きなポイントになっていると思う。今、どちらかというと移住しませんか、テレワークで来ませんかという自治体の話は個人に焦点を当てている。でも実際は、IT 系や WEB 系の会社は会社単位で住むところを問わない勤務条件にしているところがかなり多くなっている。そういう会社と連携し、鶴岡市はこういう環境があり、創造的な仕事ができる環境がある、といった働きかけをすれば、今の仕事のまま、よりよい環境で仕事をするという転職なき U ターンという形をとれて、非常に有効ではないかと思っている。

○委員

なかなか地元の企業でデジタルというイメージがつくところがない。U ターン支援で戻ってはきたけど、結局仕事がなく、フリーランスで SNS 使いながら頑張っている人が 30 代あたりには多い。U ターンで戻って終わりではなく、市もサポートしながら、仕事ができる仕組みづくりをするような工夫が必要ではないかと思う。

○委員

転職を伴わない移住は会社の制度としても推奨されている。ワーケーション協定みたいなものを締結している会社もあり、学校とかでも子供を預かってくれるサービスが結構あるらしいので、それも利用し、一週間程度などで実際にワーケーションしてみて、よかったらそこに移住する、みたいなプログラムを推奨していたりする。そういう締結を積極的にしていくのもいいのではないか。

○委員

鶴岡市の施策は多様な観点から事業や構想が実践されてきていて、非常に素晴らしいと思っている。その中で例えば、農業分野において中山間における獣害に対するデジタル化の事業が推進されている。農業におけるデジタル分野は、非常に積極的にデジタル×農業に取り組もうとしている層と、小規模農家や超高齢農家のようなデジタル化に無関心、あるいは、効用に預かれないような層に二極化していると言われている。中山間の獣害に関しても同じことが言え、コアな農家をつかまえて、恩恵やメリットがあるというような良さや売りを口コミで広げることが浸透する近道といえるかと思う。一方で、鶴岡市でデジタルの進展度と生活の満足度を問うアンケートをしているが、浸透し、良さを感じるまでは時間的な部分がかかるので、行政としてはそうはいかないかもしれないが、焦る必要はないと感じる。私が危惧すべきと思うのは、そのアンケートの中で 30 代 40 代の現状における鶴岡市の生活の満足度が極めて低いことであり、移住なども含めて議論すべきかと思う。移住に関連すると、鶴岡市は山形県 35 市町村の中でも空き家率が割と上位の方に位置している。理由としては、東北の中でも広大な面積を持っていて、中山間における空き家発生の頻度が高くなっていることであり、喫緊の課題として位置づけられているだろうが、空き家が存在することは住居の候補として考えられるとも解釈でき、決してネガティブなだけでなく、いわば表と裏の問題があると言える。そういったことを踏まえながら、30 代 40 代の生活満足度を高めることを一つの目標にし、デジタル化の進展については、双方向的なやりとりをしながら、事業を良いものにするようなシステムが次の段階として必要だろ思う。

○委員

エネルギーのデジタルイノベーションの重要性として、例えば鶴岡の再生可能エネルギーの循環管理について、下水道や風力といろいろしているが、まとまっていると鶴岡のカーボンオフセットとかが見えるのではないか、それで住民の意識が変わるの

ではないかと思った。社会インフラだけではなく、家庭でできるエネルギー循環などにもつながるよう気がするし、鶴岡は多分それができる町ではないかと思っている。

○座長

今、ヨーロッパでスマートウォータープロジェクトがすごく盛んになっている。気候変動の問題で水不足になっているのを、どう循環して水を確保するのかということを自分たちが一番課題と認識していて、プロジェクトを作って推進していたりする。社会課題に対応しているものを鶴岡オリジナルの象徴的なデジタルプロジェクトとして実施するのが重要なのかとも思った。

うまく生々しさを持ちながら相手側のニーズに応えた情報発信ができるのかが一つの大きなポイントと思う。欧州のホームページなどは、訪れる人を意識してわかりやすく並べて誘導するような情報提供を行っている。逆に内容は不十分だったりするが、その一方、日本は内容のデータはたくさんあるが、整理、誘導の仕方があまりうまくない感じもする。市民のデジタル化、移住、観光のいろんなところで情報の整理提供の仕方を改めて検討していく必要があり、それが市民への浸透や地域の活性化といったところにも貢献していくのかな、と思っている。

結局はデジタルだけではない鶴岡の成長、発展、反映にどれだけつながるか、それはデジタルから遠いところにあるかもしれないが、それをデジタルでどう実現するか、という観点でプロジェクトを進めていければと思っている。今後は事務局から話あると思いますが、具体的なテーマも含め、引き続き皆様からいろんなアドバイスをいただこうと思います。

7　その他

8　閉会